

入ってから感じた 早慶戦のすこみ

甲子園で活躍し、鳴り物入りで早慶に進んだ両者。それでも、苦労することは多かった。そして4年生になると主将に就任する。伝統の重みを感じながら、さまざまな価値観を持つ選手を束ねる難しさを味わった。だからこそ得られた達成感。そこでの経験がのちの野球人生に生かされたことは言うまでもない。

「早慶戦110周年」を迎えるわけですが、現役時代、その歴史の重みを感じたことはありませんか。

仁志 やはり早稲田のユニフォームを着た時点で、あらゆる部分での伝統を感じましたね。

高木 私は1年の秋に優勝しているんですが、六本木の交差点を止めての優勝パレード。あれこそ歴史が成せる業なのかと思います。

仁志 早稲田は神宮球場からやはり交通を止めて、明治通りを通過して高田馬場にあるキャンパスまで歩きます。1年時の優勝は雨で1日流れて月曜日。混み合う夕方の時間帯に警察の方が多数出てきて、交通規制してくれて……。本当にすごいことをしたんだと実感しましたね。

その当時からずいぶんと時間が経過しましたが、現在は東京六大学野球をどのように見えていますか。

仁志 後輩たちが目覚ましい活躍をしているので非常に鼻が高い(笑)。時代が変わり、選手間の空気感も変わっているのですが、あのユニフォームを見て、あの応援を耳にすると、気持ちは昔に戻りますね。

早慶戦110周年記念 スペシャルトークショー 8.31@日本青年館

早慶戦110周年を記念したスペシャルトークショーが8月31日、神宮球場にほど近い日本青年館で行われた。登場したのは93年早大主将の仁志敏久氏と、95年慶大主将の高木大成氏。早慶戦で激突した両者が、当時の思い出、知られざるエピソード、そして早慶戦の魅力を熱く語り合った。その模様を本誌が取材、内容をここに再現してみたい。

「早慶戦では勝負を超越した何かを感じることができた」(高木)

高木 現役当時は慶應が学生主導、早稲田は高校野球をグレートアップさせた形という、カラーの違いを感じました。でも今は、同じ「大学野球」というカラーでプレーしている印象です。

それぞれ、早稲田、慶應で野球をやった印象はいかがですか。

仁志 最初はカルチャーショックを受けましたね。僕の代は1学年で20人ほどいましたが、最終的に10人くらい。練習が厳しく、途中でやめたいので、そこまでするまで野球をしないという人間は少ないんです。高木 ウチは1学年50人ほどいて、全員がグラウンドに出てくること

が慣習なんです。そこに2浪の人がいたり、高校までソフトボールしかやっていない人がいたり。そういう選手が4年生になりようやく背番号をもらい、代打でヒットを打つたりする。そういう姿を見ると、慶應に来て良かったなと思えましたね。

お二人は4年時にそれぞれ主将を務めています。何かと苦労があったのではないのでしょうか。

仁志 常総学院高時代は、どうしたらうまくなるか、どうしたら勝てるか、それはかなり考えていました。でも、大学では野球観の違う選手も多かった。何が何でも勝ちたいではなく、負けても特に深刻に考えずに次の試合に向かう選手が多かった。4年生になるまでは優勝ができない時期が続く、勝負意味、負ける意味を無理矢理にでも教え込むことにすごく苦労しました。かなり厳しい言葉も使いましたし、厳しい練習にもみんなを取り組み、とにかく変化させることをずっと考えていました。



PROFILE

たかぎ・たいせい ●1973年12月7日生まれ。東京都出身。桐蔭学園高では3年夏に甲子園出場。3回戦に進出した。慶大では3年春の天覧試合(早大2回戦)で本塁打を放つ。4年時には主将を務めた。通算打率286、13本塁打、61打点。96年ドラフト1位で西武入団。2年目に内野手転向し、2年連続でゴールデングラブ賞を受賞。数々の故障に悩まされ、2005年限りで現役引退。その後は球団職員としてチームの裏方を担当。11年にプリンスホテルへ異動。現在は「高輪・品川マーケティング戦略マネージャー」を務めている。

高木大成

[慶大]